

調査票調査で性的指向・性自認を捉える

SOGI 設問の試験的調査に基づく考察

○釜野さおり¹ 岩本健良² 平森大規³

¹国立社会保障・人口問題研究所 人口動向研究部 ²金沢大学 人文学類

³Department of Sociology, University of Washington

1 はじめに

性的指向（性愛感情がどの性別に向くか）には、異性愛、同性愛（レズビアン、ゲイ）、両性愛（バイセクシュアル）、無性愛（アセクシュアル）が含まれる。性自認のあり方には、生まれた時に付けられた性別（出生時性別）に違和感をもたないシスジェンダーや、自分をどの性別と思うか（性自認）が出生時に付けられた性別と異なる、あるいは違和感があるトランスジェンダーが含まれる。性的指向と性自認のあり方（sexual orientation and gender identity, SOGI）をめぐる研究は稀ではなくなりつつあるが、量的研究は数少ない。日本において SOGI に関する量的研究が進まない要因の一つは、性的マイノリティと異性愛者・シスジェンダーとの比較を、一般化が可能な形で分析できるデータがないことであり、その足かせとなっているのが、回答者の性的指向や性自認のあり方や、性の多様性に関する知識の度合いに関わらず、回答できる設問が確立されていないことにある。報告者らは、こうした問題意識から、SOGI を調査票調査で捉える設問の研究を進めてきた。

アメリカ、イギリス、カナダ、ニュージーランドなどでは公的調査で用いる SOGI の設問の研究を専門家も含めて進めている。本研究と同様、特定の選択肢が選ばれる背景を調べた研究では、アメリカの National Health Interview Survey の設問の検討において、National Survey of Family Growth で用いられた選択肢を回答者がどのように理解したかをたずねる質的調査を行い、「その他の何か」(Something else) や「わからない」(Don't know) の回答には、他の選択肢に振り分けることのできるものがあつた一方で、性的指向を決めていない・迷っている、提示された以外の性的指向の自認を持っている、用語の意味がわからなかったなど、さまざまな理由で選択されているものがあることを示した (Miller & Ryan, 2011)。

2 研究の背景と目的

まず、SOGI 設問の試験的調査の実施に至った背景として、SOGI 設問の事前調査および大阪市民調査について述べる。報告者らのチームでは、調査票調査で SOGI を捉える設問を検討するため、2017年9月～12月に性的マイノリティと性的マイノリティでない人々の双方を対象としたフォーカス・グループ・ディスカッションやメールによるアンケートを行なった。先行研究を参考にして複数の設問候補への回答を依頼した上で、回答しやすさ、理解しやすさ、文言の適切さ、用語の説明の必要性、選択肢の並び順等についての意見をたずねた。収集した意見を総合的に考慮し、設問を決定した。

上記の SOGI 設問を含む「大阪市民の働き方と暮らしの多様性と共生にかんするアンケート」（大阪市民調査）を 2019 年 1 月～2 月、同市の住民基本台帳から無作為抽出した 18～59 歳の 15,000 人を対象とし、郵送法（ウェブ回答可）によって実施した（有効回収数 4285、有効回収率 28.6%）。性的指向の自認（自分の性的指向をどのように認識しているか）を「次の中で、あなたにもっとも近いと思うものに○をつけてください」とたずねた結果、「異性愛者」83.2%、「レズビアン・ゲイ・同性愛者」0.7%、「バイセクシュアル・両性愛者」1.4%、「アセクシュアル・無性愛者」0.8%、「決めたくない・決めていない」5.2%、「質問の意味がわからない」7.5%であった。

設問を検討した際、性的指向について迷っている人や、積極的に決めたくないとする人が「決めたくない・決めていない」を選ぶことを想定したが、相対的に選択率が高かったことから、意味がわからずに回答に迷った人や性的指向について考えたことのない人も含まれる可能性があると考え、モニタを対象としたウェブ調査を実施し、この選択肢を選んだ人にその理由をたずねることとした。

3 研究方法

インターネット調査会社にモニタ登録している全国の 18～59 歳にインターネット上で調査を実施した（実施期間：2020 年 3 月 23 日～30 日）。目標回収数を 1,400 とし、スクリーニングによって性別（男・女の 2 区分）と年齢階級（18-29 歳、30-39 歳、40-49 歳、50-59 歳の 4 区分）の計 8 区分それぞれが 180 サンプル（50-59 歳は 160 サンプル）となるように設定した。さらに性的指向の自認の設問における「決めたくない・決めていない」の回答が各区分の 15%を占めることを目指した。また、三浦（2019）を参考にスクリーニング段階で“satisficers”を除外する措置を講じた。性的指向をたずねる複数の設問への表示順によって回答が変わる可能性も考慮し、表示順を変えた 6 種の画面を作成し、各区分の中で対象者をランダムに振り分けた。質問数は 51 であった。

4 結果

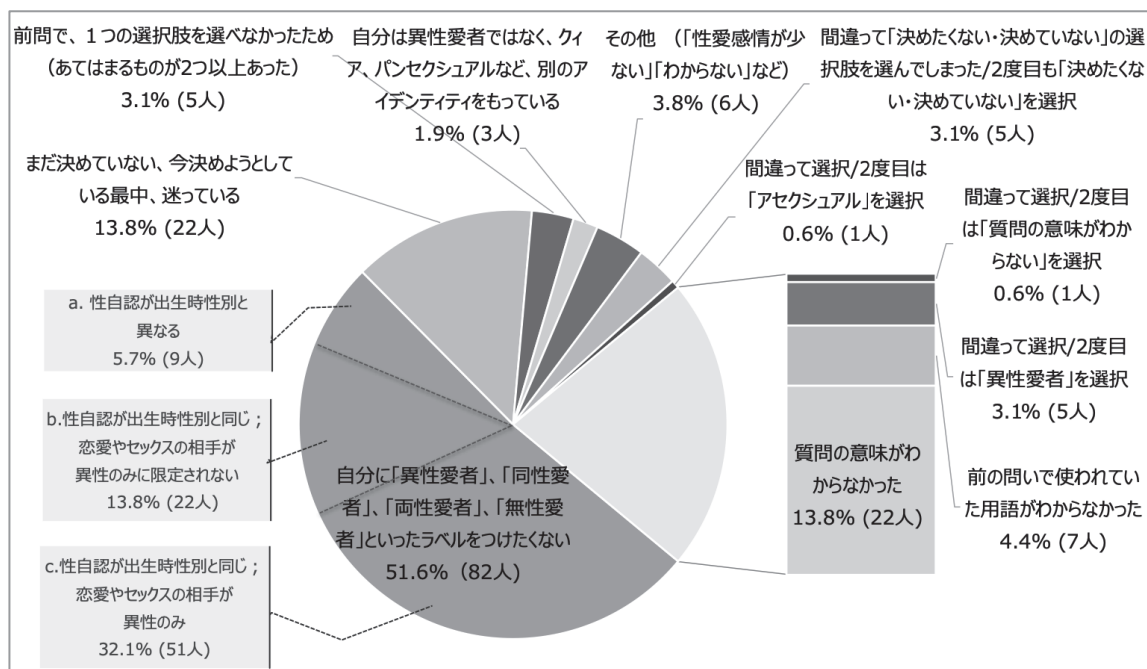
スクリーニング調査の開始数は 7,263、条件を満たした完了数は 7,139、“satisficers”を除外する 2 段階プロセスを通過したのは 5,005、本調査の回答が開始されたのは 2,814 であった。最後まで回答されていないもの、本調査で回答された年齢が対象範囲外のもの、「その他」の記述欄に不適切な記入がされたもの、トラップ設問への不正回答、重複回答が疑われた場合の 2 回目以降の回答は無効とし、2,394 を有効回答とした。2,394 人中、本報告の分析対象である「決めたくない・決めていない」を選択した回答者は 159 人（6.6%）であった（表 1）。

表 1 性的指向の自認の設問における各選択肢の選択者数と割合

	n	%
決めたくない・決めていない	159	6.6
異性愛者、すなわちゲイ・レズビアン等でない [異性のみに性愛感情を抱く]	2014	84.1
質問の意味がわからない	90	3.8
バイセクシュアル・両性愛者 [男女どちらにも性愛感情を抱く人]	62	2.6
アセクシュアル・無性愛者 [誰に対しても性愛感情を抱かない人]	49	2.0
ゲイ・レズビアン・同性愛者 [同性のみに性愛感情を抱く人]	20	0.8
全体	2394	100.0

次にこの159人に「決めたくない・決めていない」を選んだ理由を選択肢式でたずね、「その他」と回答した人にはその内容を記入してもらった。「間違っただけでこの選択肢を選んでしまった」と回答した人には、性的指向の自認の設問を再度たずねた。図1にこれらの回答を統合して集計した結果を示す。もっとも多くの人を選んだのは「自分に「異性愛者」、「同性愛者」、「両性愛者」、「無性愛者」といったラベルをつけたくない」で51.6%、次に多かったのが「まだ決めていない、今決めようとしている最中、迷っている」と「質問の意味がわからなかった」で、それぞれ13.8%であった。「間違っただけで「決めたくない・決めていない」の選択肢を選んでしまった」人は7.5%で、2度目の回答をみると「異性愛者」3.1%、「アセクシュアル・無性愛者」と「質問の意味がわからない」が0.6%、「決めたくない・決めていない」は3.1%であった。

図1 「決めたくない・決めていない」を選んだ理由の内訳 (n=159)



もっとも多い「自分にラベルをつけたくない」と回答した82人については、性自認が出生時性別と同じか異なるかによって区別し、異なる人については、さらに恋愛感情を抱く相手、性的に惹かれる相手、セックスの相手(「恋愛やセックスの相手」と略記)が「異性のみ」の人と「異性のみ限定されない」人に分けた。その結果、「a. 性自認が出生時性別と異なる」が9人、「b. 性自認が出生時性別と同じ; 恋愛やセックスの相手が異性のみ限定されない」22人、「c. 性自認が出生時性別と同じ; 恋愛やセックスの相手が異性のみ」が51人であった。ここでいう「異性のみ限定されない」とは、恋愛やセックスの相手の1項目以上で、「ほとんど異性」、「男性と女性同じくらい」、「ほとんど同性」、「同性のみ」、「(該当する経験がない)のいずれかが選択された場合である。

理由の分布を出生時性別にみると、「質問の意味がわからなかった」と「間違っただけで選んでしまった」は男性に多く、「ラベルをつけたくない」は女性に多かった。年代別では、30歳未満に「まだ決めていない・今決めようとしている最中、迷っている」が多く、「ラベルをつけたくない」および「間違っただけで選んでしまった」が少ないという特徴があった。

5 まとめ

調査票調査における SOGI 設問を精査するために行なったモニタ型ウェブ調査に基づき、性的指向の「決めたくない・決めていない」の回答の詳細を分析した結果を示した。「決めたくない・決めていない」が選択される背景はさまざまであったが、間違っただり、質問の意味がわからずに選んだりした人は少数であり、8割程度の人が「決めたくない・決めていない」の意味を十分に検討して回答した結果ではないかと思われる。この選択肢を選択した理由を分析すると、性別二元論やマイノリティ・マジョリティの二元的な捉え方では、十分に把握することができない人々が一定割合で存在することが明らかになった。すなわち、人々の性的指向のあり方は、必ずしも「異性愛者」、「同性愛者」、「両性愛者」といった形で明確に分かれている・分けられるものではなく、複雑で多面的であることが定量的に示されたと言える。

上記の結果はまた、性的指向を調査票調査で捉える際に、「決めたくない・決めていない」を積極的に位置付けることの意義を物語っている。これまでの研究成果を踏まえると、調査票調査によって性的指向の自認を捉える際には、性的指向の自認をたずねる設問に加え、「決めたくない・決めていない」と回答した人に、その理由をたずねる設問を含めることが望ましいと言える。また、性的指向の自認をたずねる設問や「決めたくない・決めていない」の回答をどのように扱うかを標準化することで、調査間での結果の比較をしやすくし、今後の研究の進展にも寄与すると考える。

※本調査は、JSPS 科研費 16H03709 「性的指向と性自認の人口学-日本における研究基盤の構築」の助成を受け、国立社会保障・人口問題研究所 研究倫理審査委員会の承認を得て実施したものである（承認番号 IPSS-IBRA #19005）。

参考文献

Miller, K., & Ryan, J.M. (2011). *Design development and testing of the NHIS sexual identity question*. Retrieved from <https://www.impactprogram.org/wp-content/uploads/2011/11/Miller-2011-HHS-report-on-measuring-sexual-orientation.pdf>

三浦麻子 (2019). 「ウェブ調査における回答者の努力の最小限化—Satisfice 行動がデータの質に及ぼす影響—」一般社団法人輿論科学協会 創立 74 周年記念行事 講演配布資料, 2019 年 10 月 21 日 (公益財団法人日本文化興隆財団 代々木会議室) .

※本報告で用いた設問等については『性的指向における「決めたくない・決めていない」の回答を探る—性的指向・性自認に関する設問の改善に向けた試験的調査—の結果より—』http://www.ipss.go.jp/projects/j/SOGI/20200701_Report_on_Undecided.pdf、大阪市民調査については [osaka-chosa.jp](http://www.osaka-chosa.jp)、プロジェクト全体については <http://www.ipss.go.jp/projects/j/SOGI/> に詳しい。